奈良県立大学「研究季報」創立50周年記念号（第14巻２・３号）

都市生活者からみた山間地域

小松原　　尚

１．はじめに－都市機能と山間地域－
２．属性別にみた山村地域の魅力
３．山間地域に対するイメージ
４．宿泊観光地としての山間地域への期待
５．まとめ－都市機能分担の展望－

１．はじめに－都市機能と山間地域－

新しい全総計画（『21世紀の国土のグランドデザイン』）にあってはかつての過疎地域にかわって多自然居住地域という地域の名称が登場している。このことは単に従来の過疎地域の読替えを意味するものではない。停滞・縮小基調のわが国の産業構造にあって、これまで大都市圏からの財政資金の還流に依存していた山間地域にあって、当該地域の資源を活用し、従来の山間地域の産業と結びつける形で新たな産業を再構成し、山間地域の自活を促そうとするものである。こうした試みの中で重要なのは、都市集積の利益の波及効果をどこまで山間地域において吸収できるかにある。このことは都市機能の中に恵まれた自然環境を有する山間地域どう位置づけるかという問題でもある。

都市への人口集中の高まりと過密に伴う住環境の劣化は自然への関心の高まりを引き起こしている。交通インフラの整備とモータリゼーションの進展によって日帰り観光圏は大きく拡大した。このことは旧来の山間地域も都市の観光・レクリエーション機能を担い、都市圏の一部を構成する可能性を示しているとも考えられる。しかし、山間地域が都市機能の一部を分担するには単に自然観光資源が存在するだけでは不十分である。都市生活者を引き付けるためのそこでしか得られない仕掛けや魅力が必要となる。より高次のサービスの質を都市生活者は求める。宿泊観光地として、山間地域の自然や歴史をそうしたニーズにどのように適応させていくかも大きな課題である。

都市研究の動向に関しては、都市圏研究が日常生活圏を中心に進展をみた[(1)]。一方、山間地域における観光振興の研究業績も多い。しかし、都市圏の機能地域の一部として山間地域を位置づけ、観光・レクリエーション機能の側面からアプローチした成果は乏しい[(2)]。

そこで、こうした課題に接近するために、都市住民アンケート調査を実施した。アンケートの質問内容は第１表に示した通りである。目的と概要は以下の通りである。すなわち、都市部に居住する人々を対象にして、自然環境を利用した観光開発を考えるために、都市生活者の山間部に対するイメージを明らかにすることを目的とした。アンケート原案は当時、小松原が指導にあたったゼミナールに所属する学生であった森田裕一君（その後、埼玉大学教養学部へ編入学）が作成し、小松原が加筆・補正を行った。調査の方法は、アンケート調査に回答可能な男女を調査協力者に選定してもらい、その方々に用紙を渡し、その後記入済の用紙を回収する標本収集法を採用した。調査地域は関東地方、関西地方および、島根県松江市である。質問用紙の配布と回収は関東、関西は森田が、島根は小松原がそれぞれ担当した。調査期間は

第1表 アンケートの質問項目の構成

質問番号	質問事項	
1	山間の村や町に魅力を感じますか。	
2	「山間の村や町に対するイメージはどういったものでしょうか。下から1つ選んで下さい。	
	a	秘境
	b	身内的感情
	c	不便
	d	教育によい環境
	e	第2の人生の場
	x	その他（具体的に）
3	山間の「町」や「村」に1泊以上で遊びに行くとしたら、何を求めますか。優先順位第3位まで回答をお願いいたします。	
	a	きれいな空気
	b	水遊びできる川、せせらぎ
	c	森林、森林浴
	d	星空
	e	温泉
	f	山の幸・山菜、川魚など
	g	地酒
	h	工芸・陶芸など
	i	農業体験
	j	静寂さ
	k	懐かしい風景
	x	内容と優先順位を明記
	y	
	z	

2002年7月15日から8月15日までであり、回収サンプル数は110件であった。

2．属性別にみた山間地域の魅力

まず、第2表から都市生活者にとっての山間地域の魅力を属性別にみてみよう。

(1) 圏域別にみた傾向

大都市圏と地方圏に分けて検討してみた。ここでいう大都市圏とは居住地基準で、関東、東山、東海、近畿地方の都府県をさす。したがって、地方圏とは上記以外の道県のことである。上記の基準によって分類すると、アンケート標本110件の中で、大都市圏居住者は60.0％にあたる66人であり、地方圏居住者は40.0％で44人である。次に、山間地域への魅力については、大都市圏居住者ではその81.8％にあたる54人

が肯定しており、地方圏にあっても77.3%にあたる34人である。このように都市圏にあっても、地方圏にあっても山間地域の魅力を肯定的に捉えられている件数が極めて多い。

(2) 性別にみた傾向

男女別に検討した。回答者の中で男性は58名、女性は52名であり、構成比はそれぞれ52.7%と47.3%であり、ほぼ均衡している。男女で山間の町村への関心の違いがあるかをみてみると、男性の場合、魅力を感じると答えた人が47人、逆に、魅力を感じないとの答えが11人で、魅力を感じる人が8割を上回っている。同様の傾向は女性についても指摘でき、本アンケートに関しては、男女とも、山間の町村への関心が高いという傾向がうかがえる。

(3) 年齢別にみた傾向

回答者の年齢層を表のように三分してみた。30歳未満が72人で6割以上を占めている。次いで30歳以上50歳未満が27人で4分の1程度、そして50歳以上が11人でちょうど1割である。以上のようにアンケートの回答者の年齢層に若年層への偏りが見られることは否めない。ただし、魅力を感じる人の割合には年齢による特筆すべき偏倚は見られなかった。具体的には、30歳未満では魅力を感じるとした人は81.1%（58人)、30歳以上50歳未満では77.8%（21人)、50歳以上では81.8%（9人）になっていることからわかる。さらに、年齢層を越えて山間町村への関心が大きいこともわかる。

(4) 職業別にみた傾向

次に回答者の職業を3分別してみた。これらのカテゴリーの中で、学生・生徒が全体の7割弱の75人、会社員・教員など有職者が3割弱の30人弱、そして無職・その他が若干という構成になっている。年齢層とも関連するが、学生・生徒の回答者の構成に占める割合が大きくなっている。ただし、山間地域に魅力を感じる人の割合は職業による差異はみられなかった。例えば、実人数は学生・生徒が60人、会社員・教員など有職者が24人、無職・その他が4人となっているがそれぞれの階層の中での魅力を感じる人の構成比はいずれも80%である。

以上のように、本アンケートにあっては回答者の居住地の圏域別、性別、年齢別、職業別のいずれにあってもそれぞれの属性の中での階層間に、山間地域の魅力に関して差異はみられず、高い関心を示していることが明らかになった。そこで、以下では山間地域に関するイメージや価値観の差異を山間地域への魅力を感じる人々と感じない人々それぞれの差異をみていくことにする。

3．山間地域に対するイメージ

山間地域への魅力を感じると答えた人（Yと略記する）の理由としては、自然、緑そして清澄な空気をキーワードにした文言が30例を占めている。さらに、穏やかさ、静けさ、安らぎ、落ち着き、のどかさ、リラックス、ゆとりといった一連の言葉が回答の中に21例ある。このように、都会では味わえない、しかも抽象的な感覚（例えば安らぎや静けさといったようなもの）が求められているように考えられる。一方、山間地域に魅力を感じないと答えた人（Nと略記する）では、不便、交通手段の劣位といった利便性にかかわる理由をあげたものが6例あり、注目される。

次に、山間地域のイメージに関した質問への答えをみてみた（第3表)。すると、Yグループでは、「c．不便」と「a．秘境」とが20%以上でそれぞれ20人と18人であり、ほぼ同数である。「a.」と「c.」とは表裏一体の関係とも考えられる。人里離れた秘境となりうるところは、一方では、深山幽谷で交通の利便性には劣るわけである。

また、「b．身内的感情」の13人と「d．教育によい環境」の12人もほぼ並んでいる。「身内的感情」というのは親近感を得るということであり、感覚的な暖かさを感じ、包み込まれるような状況をイメージし

第2表 山間地域への魅力感の有無

		計	魅力を感じる	魅力を感じない
圏域別	大都市圏	66 [60. 0] (100. 0)	54 [61. 4] (81. 8)	12 [54. 5] (18. 2)
	地方圏	44 [40. 4] (100. 0)	34 [38. 6] (77. 3)	10 [45. 5] (22. 7)
性別	男性	58 [52. 7] (100. 0)	47 [53. 4] (81. 0)	11 [50. 0] (19. 0)
	女性	52 [47. 3] (100. 0)	41 [46. 6] (78. 8)	11 [50. 0] (21. 2)
年齢別	30歳未満	72 [65. 5] (100. 0)	58 [65. 9] (80. 6)	14 [63. 6] (19. 4)
	30歳以上 50歳未満	27 [24. 5] (100. 0)	21 [23. 9] (77. 8)	6 [27. 3] (22. 2)
	50歳以上	11 [10. 0] (100. 0)	9 [10. 2] (81. 8)	2 [9. 1] (18. 2)
職業別	学生・生徒	75 [68. 2] (100. 0)	60 [68. 2] (80. 0)	15 [68. 2] (20. 0)
	会社員・教員など有職者	30 [27. 3] (100. 0)	24 [27. 3] (80. 0)	6 [27. 3] (20. 0)
	無職・その他	5 [4. 5] (100. 0)	4 [4. 5] (80. 0)	1 [4. 5] (20. 0)
合計		110 [100. 0] (100. 0)	88 [100. 0] (80. 0)	22 [100. 0] (20. 0)

第3表 山間地域のイメージ

	魅力を感じる	魅力を感じない	計
a. 秘境	18 [20. 5] (94. 7)	1 [4. 5] (5. 3)	19 [17. 3] (100. 0)
b. 身内的感情	13 [14. 8] (86. 7)	2 [9. 0] (13. 3)	15 [13. 6] (100. 0)
c. 不便	20 [22. 7] (62. 5)	12 [54. 5] (37. 5)	32 [29. 1] (100. 0)
d. 教育によい環境	12 [13. 6] (100. 0)	0 [0. 0] (0. 0)	12 [10. 9] (100. 0)
e. 第２の人生の場	7 [8. 0] (87. 5)	1 [4. 5] (12. 5)	8 [7. 3] (100. 0)
x. その他、無回答	18 [20. 5] (75. 0)	6 [27. 3] (25. 0)	24 [21. 8] (100. 0)
合計	88 [100. 0] (75. 0)	22 [100. 0] (25. 0)	110 [100. 0] (100. 0)

たものである。教育によい環境というのは、そうした状況の中で落ち着いた勉学環境を期待できると考えていると推し測られる。「e．第二の人生の場」というのは少数である。

Yグループのイメージで、その他のものとしては、内面的な豊かさをイメージした例が多い。例えば、のどか、のんびり、いやし、人間的なくらし、静けさ、やすらぎである。また、自然、緑のような自然環境に恵まれているというイメージも少なからずある。

次に、Nグループの理由についてみてみると、「c．不便」としたものが最も多くなっている。山間地域の魅力に否定的な人の中で、半数以上が、上記の理由をあげていることがわかる。また、その他として具体的に記された理由としては、村落社会の閉鎖性（田舎、排他的、村社会）をあげたものが多かった。

最後に、「a.」から「e.」までの各項目それぞれについて、YグループとそうでないNグループと、その構成比をみてみる（それぞれY比、N比と仮称する）。それによると、「a．b．d．e.」ではN比が僅かであるが、c．では37.5%と大きくなっている。また、「その他」においてN比が比較的大きいのは、理由の多様性を示していると考えられる。

4．宿泊観光地としての山間地域への期待

宿泊を前提とした山間地域への旅行を行おうとする場合にいかなる要素がそういった行動を起こさせるのかということを検討してみる。

まず、第4表の(1)により1位に選択された項目をみてみると、YグループとNグループの合計で最も多かったのは、「a.きれいな空気」である。次いで、「b.水遊びできる川、せせらぎ」「e.温泉」が同数で続いている。これらの他に1位選択件数合計に占める割合が10%以上のものをあげれば、「c.森林、森林浴」であり、手近な、手付かずの自然環境に親しむ機会を都市生活者が求めている傾向を読み取れよう。

次に、Yグループの中では、合計の傾向とほぼ一致しており、Yグループのイメージが反映された結果となっている。これに対して、Nグループは第1位にあげた項目の中で、大きな割合を占めたのは、「e．温泉」「a．きれいな空気」である。「b．c．j.」が比較的大きな割合を占めていたYグループとは対照的である。

第2位にあげたものでは、「b．水遊びできる川、せせらぎ」が合計で最も多い。全体の合計の中の2割以上を占めているのはこの「b.」だけである。次いで「f．山の幸・山菜、川魚」「c.森林、森林浴」「d．星空」が1割以上を占めている。中でも「f.」は第1位の場合と比較すると第2位の中での比重が大きく際立っている。YグループとNグループの別ではYグループについてはほぼ全体の動向と軌を一にしている。さらにNグループでは大部分が「b.」であり、第2位の傾向を一層特徴付けている［第4表の(2)］。

第3位では、「c．森林、森林浴」を動機としてあげているケースが最も多くなっている。全体の2割以上（23件）を占めるのはこの項目だけである。次いで10件以上かつ1割以上の項目は多い順に「d．星空」「j．静寂さ」「e．温泉」「b．水遊びできる川、せせらぎ」の順番になっている。1位、2位の場合と同じようにYクループの傾向がそのまま反映されている。Nグループでは「c．森林、森林浴」「j．静寂さ」が4件で最も多い［第4表の(4)］。

次に、1位を3点、2位を2点、3位を1点としてそれらの合計値を検討してみた［第4表の(4)］。「b．水遊びできる川、せせらぎ」と「a．きれいな空気」が100ポイント以上で最も多いランクである。次いで「c．森林、森林浴」が90ポイント台である。これら3項目を合わせると300ポイント以上になり、ポイント総合計の半数近くを占めることになる。このことからも、都市生活者の自然志向が伺える。50ポイント以上90ポイント未満についてみると、「e．温泉」「d．星空」「f．山の幸・山菜、川魚など」「j．

第4表の1 宿泊地としての山間地域の魅力(1)

		1位		
		計	魅力を感じる	魅力を感じない
a	きれいな空気	28 (100. 0) [25. 7]	22 (78. 6) [25. 6]	6 (21. 4) [26. 2]
b	水遊びできる川、せせらぎ	18 (100. 0) [16. 6]	16 (78. 6) [18. 6]	2 (21. 4) [8. 7]
c	森林、森林浴	12 (100. 0) [11. 0]	11 (91. 7) [12. 8]	1 (4. 3) [8. 3]
d	星空	8 (100. 0) [7. 3]	5 (62. 5) [5. 8]	3 (37. 5) [13. 0]
e	温泉	18 (100. 0) [16. 5]	11 (61. 1) [12. 8]	7 (38. 9) [30. 5]
f	山の幸・山菜、川魚など	8 (100. 0) [7. 3]	5 (62. 5) [5. 8]	3 (37. 5) [13. 0]
g	地酒	0 (0. 0) [0. 0]	0 (0. 0) [0. 0]	0 (0. 0) [0. 0]
h	工芸・陶芸など	0 (0. 0) [0. 0]	0 (0. 0) [0. 0]	0 (0. 0) [0. 0]
i	農業体験	1 (100. 0) [0. 9]	1 (100. 0) [1. 1]	0 (0. 0) [0. 0]
j	静寂さ	10 (100. 0) [9. 2]	9 (90. 0) [10. 5]	1 (10. 0) [4. 3]
k	懐かしい風景	6 (100. 0) [5. 5]	6 (100. 0) [7. 0]	0 (0. 0) [0. 0]
合 計		109 (100. 0) [100. 0]	86 (78. 9) [100. 0]	23 (21. 1) [100. 0]

第4表の2 宿泊地としての山間地域の魅力(2)

		2位		
		計	魅力を感じる	魅力を感じない
a	きれいな空気	10 (100. 0) [9. 3]	8 (80. 0) [9. 4]	2 (20.0) [9.1]
b	水遊びできる川、せせらぎ	24 (100. 0) [22. 5]	16 (66. 7) [18. 8]	8 (33.3) [36.5]
c	森林、森林浴	16 (100. 0) [15. 0]	15 (93. 8) [17. 6]	1 (6.3) [4.5]
d	星空	14 (100. 0) [13. 1]	10 (71. 4) [11. 8]	4 (28.6) [18.2]
e	温泉	8 (100. 0) [7. 5]	6 (75. 0) [7. 1]	2 (25.5) [9.1]
f	山の幸・山菜、川魚など	17 (100. 0) [15. 9]	14 (82. 4) [16. 5]	3 (17.6) [13.6]
g	地酒	0 (0. 0) [0. 0]	0 (0. 0) [0. 0]	0 (0.0) [0.0]
h	工芸・陶芸など	1 (100. 0) [0. 9]	1 (100. 0) [1. 1]	0 (0.0) [0.0]
i	農業体験	0 (0. 0) [0. 0]	0 (0. 0) [0. 0]	0 (0.0) [0.0]
j	静寂さ	10 (100. 0) [9. 3]	9 (90. 0) [10. 6]	1 (10.0) [4.5]
k	懐かしい風景	7 (100. 0) [6. 5]	6 (85. 7) [7. 1]	1 (14.3) [4.5]
合 計		107 (100. 0) [100. 0]	85 (79. 4) [100. 0]	22 (20. 6) [100. 0]

第4表の3 宿泊地としての山間地域の魅力(3)

		3位		
		計	魅力を感じる	魅力を感じない
a	きれいな空気	7 (100. 0) [6. 6]	7 (100. 0) [8. 0]	0 (0.0) [0.0]
b	水遊びできる川、せせらぎ	11 (100. 0) [10. 4]	9 (81. 8) [10. 3]	2 (18.2) [10.5]
c	森林、森林浴	23 (100. 0) [21. 8]	19 (82. 6) [21. 9]	4 (17.4) [21.1]
d	星空	17 (100. 0) [16. 0]	15 (88. 2) [17. 3]	2 (11.8) [10.5]
e	温泉	14 (100. 0) [13. 2]	11 (78. 6) [12. 7]	3 (21.4) [15.8]
f	山の幸・山菜、川魚など	10 (100. 0) [9. 4]	7 (70. 0) [8. 0]	3 (30.0) [15.8]
g	地酒	1 (100. 0) [0. 9]	1 (100. 0) [1. 1]	0 (0.0) [0.0]
h	工芸・陶芸など	0 (0. 0) [0. 0]	0 (0. 0) [0. 0]	0 (0. 0) [0. 0]
i	農業体験	1 (100. 0) [0. 9]	1 (100. 0) [1. 1]	0 (0. 0) [0. 0]
j	静寂さ	16 (100. 0) [15. 1]	12 (75. 0) [13. 9]	4 (25.0) [21.1]
k	懐かしい風景	6 (100. 0) [5. 7]	5 (83. 3) [5. 7]	1 (16.7) [5.2]
合 計		106 (100. 0) [100. 0]	87 (82. 1) [100. 0]	19 (17. 9) [100. 0]

第4表の4 宿泊地としての山間地域の魅力(4)

		得点		
		計	魅力を感じる	魅力を感じない
a	きれいな空気	111 (100. 0) [17. 1]	89 (80. 2) [17. 1]	22 (19.8) [16.7]
b	水遊びできる川、せせらぎ	113 (100. 0) [17. 4]	89 (78. 8) [17. 1]	24 (21.2) [18.2]
c	森林、森林浴	91 (100. 0) [14. 1]	82 (90. 1) [15. 9]	9 (9.9) [6.8]
d	星空	71 (100. 0) [10. 9]	52 (73. 2) [10. 0]	19 (26.8) [14.4]
e	温泉	84 (100. 0) [12. 9]	56 (66. 7) [10. 8]	28 (33.3) [21.2]
f	山の幸・山菜、川魚など	68 (100. 0) [10. 4]	47 (69. 1) [9. 1]	21 (30.9) [15.9]
g	地酒	1 (100. 0) [0. 1]	1 (100. 0) [0. 2]	0 (0.0) [0.0]
h	工芸・陶芸など	2 (100. 0) [0. 4]	2 (100. 0) [0. 4]	0 (100.0) [0.0]
i	農業体験	4 (100. 0) [0. 6]	4 (100. 0) [0. 8]	0 (0.0) [0.0]
j	静寂さ	68 (100. 0) [10. 4]	62 (91. 2) [11. 9]	6 (8.8) [4.5]
k	懐かしい風景	38 (100. 0) [5. 8]	35 (92. 1) [6. 7]	3 (7.9) [2.3]
合 計		651 (100. 0) [100. 0]	519 (79. 7) [100. 0]	132 (20. 3) [100. 0]

静寂さ」の順になっている。

静かな温泉地の宿で郷土料理に舌鼓を打ち、星空を眺めつつお湯に浸かるというイメージが想像できる。この傾向はYグループの集計結果とも一致している。一方、Nグループでは、総合計100ポイント余りの中で20ポイント台は順に「e．温泉」「b．水遊びできる川、せせらぎ」「a．きれいな空気」そして「f．山の幸・山菜、川魚など」となる。それから「d．星空」が19ポイントで続いている。これらの中で、Yグループに比べてのNグループの特徴は「e．温泉」のウエイトが相対的に大きいということである。

5．まとめ－都市機能分担の展望－

これまでの考察の結果から都市生活者の山間地域への関心は、圏域、性別、年齢、職業を超えて、高いことがわかった。そして、そうした人々は山間地域に対して、自らの日常生活とは異なった豊かな自然環境のなかで休息や様々な体験活動への期待が大きいと考えられる。さらに、手付かずの自然への期待のみならず、山間地域に対する関心の希薄な人々にとっても温泉などは魅力となっている。都市生活者にあっては、健康志向が高まり、大都市圏においても工夫を凝らした入浴施設が盛況を呈している。この点を踏まえると、山間地域に関心の乏しい人々にも新たな需要を期待できる。

わが国の国土面積の6割以上は森林である。一方、国民の7割以上は都市で生活している。この両者を結びつけるもののひとつが観光・レクリエーションである。上記の脈絡からこうした需要はこれからも増大すると考えられる。しかし、都市圏における観光・レクリエーション機能を分担するような、リピーターの確保可能な持続的な観光地として存続するには多くの課題がある。たとえば、観光も多様なサービス業の複合体であるから、そのサービス生産には都市生活者からのより高度かつ多様な需要への対応はおろそかにできない。

今後、観光・レクリエーションの形態にあっても少量多品目化が一段と進むと考えられる。このような段階にあって、需要の取込みのためには個別地域の対応だけでなく、隣接地域との連繋が不可欠である。近年、山間地域相互間や山間地域と大都市圏との連絡のための道路整備が格段に進展した。広域的な連携による観光・レクリエーション機能の整備を考える上では、サービス集積を念頭に置いた戦略的な道路網の利用を考える必要がある。そのためには、都市圏における機能地域の中に山間地域を位置づけ、人の流れと意識の動きを構造的に解明することが必要になる。

謝辞

本稿は以下に記す教育研究プロジェクトの成果の一部である。貴重な研究機会と様々な便宜を与えていただいた関係各位に感謝申し上げる。

・奈良県十津川村教育委員会「十津川創生塾事業」
・神戸学院大学経済学会「観光とホスピタリティに関する研究プロジェクト事業」
・奈良県立大学「地域貢献型キャンパス事業」

注

(1) 都市圏の研究動向をまとめた概説書としては、富田和暁・藤井正編(2001)をとりあえずあげておく。その中で、大都市圏の定義、通勤・通学、買物など日常の生活行動に着目した都市圏の構造研究が紹介されている。

(2) 小松原尚(2002)おいては、観光地の主要市場が都市、中でも3大都市圏であることを考慮に入れ、北海道における自然観光資源の利用をケーススタディーに都市機能の中における観光・レクリエーションの位置づけを考察している。

文献

富田和暁・藤井正編(2001)『図説・大都市圏』古今書院，120p.

小松原尚(2002)『北海道における観光地の存立形態』奈良県立大学，93p.